風の物語

UNE HISTOIRE DE VENT

ドキュメンタリー映画の父ヨリス・イヴェンスが残した映画と中国のためのファンタジックな遺言

大地が息づくとき、人、それを風と呼ぶ……

監督＋脚本―ヨリス・イヴェンス　マルセリーヌ・ロリダン　出演―ヨリス・イヴェンス／リュウ・クイリャン　リュウ・チャン

1988年　フランス　カラー　35ミリ　1時間18分　配給―ユーロスペース

1988年ベネチア映画祭出品　1989年ニューヨーク映画祭出品　1989年山形国際ドキュメンタリー映画祭招待

風の物語 UNE HISTOIRE DE VENT

1988年 フランス カラー 35ミリ 1時間18分 配給＝ユーロスペース
1988年ベネチア映画祭出品／1989年ニューヨーク映画祭出品
1989年山形国際ドキュメンタリー映画祭招待

監督＋脚本＝ヨリス・イヴェンス／マルセリーヌ・ロリダン 撮影＝ティエリー・アルボガスト／ジャック・ロワズルー 音楽＝ミシェル・ポルタル
出演＝ヨリス・イヴェンス／リュー・クィリャン（魔女）／リュー・チャン（月の妖精）／ハン・ツェンシャン（猿）／リー老人（太極拳の師匠）

ドキュメンタリーとファンタジーを超えた新しい地平

風を待つ老人

❖20世紀の激動する世界を記録し続けたドキュメンタリー映画の巨匠ヨリス・イヴェンス。そのイヴェンスが、公私ともどもの伴侶であるマルセリーヌ・ロリダンと一緒に、1980年から構想し、1984年から4年がかりで中国で撮影したのが、この『風の物語』。

❖舞台は中国のゴビ砂漠。風を撮影することをひたすら望む老イヴェンス、風を待つ間の彼の想念、中国4000年の歴史などが交錯する摩訶不思議な世界。現実なのか、夢想なのか……。この『風の物語』は、ドキュメンタリーとファンタジーを超えた新しい地平を切り開いたものとして、昨年の山形国際ドキュメンタリー映画祭をはじめ、世界各地の映画祭で上映され、絶賛を浴びた。

❖この『風の物語』の完成後、1989年6月28日、ヨリス・イヴェンスは、映画に捧げたその長い人生の幕をパリで閉じた。享年90歳。現役監督としてはおそらく最高齢による作品であり、また世界の映画界の最長老による遺言でもある。

なぜ風なのか

❖目に見えぬ風を撮るという試み……。「撮れないものを撮るのは最高だ」とするイヴェンスの不敵な挑戦と、それを支えてきた人生観を見る思いがする。なぜ風なのか。太極拳の長老がそれに答える。すなわち「秋風の息吹き」、つまり「気」である、と。イヴェンス自身もその長い映画歴のなかで風を撮ってきた。オランダという「風の国で生まれた」イヴェンスにとって、風は親しい仲間でありライバルだったともいえる。

❖『四億』で日本の侵略と闘う中国人民の姿を記録して以来、中国はイヴェンスにとって最も愛着のある国のひとつになった。その『四億』で用いたアイモ・キャメラが、イヴェンスによって中国共産党の映画人の手に極秘で渡され、新生中国の映画製作に大きな役割を果たしたのは、有名な話。イヴェンスは、中国の社会主義建設に対する深い共感とともに、東洋という、西洋とは異質の思考形態や感性のあり方に対する強い関心を抱いたようだ。

❖風と中国、この両者はイヴェンスにとって人生のなかで大きな位置を占めている。その両者が結ばれて、『風の物語』が誕生した。マルセリーヌ・ロリダンは次のようにいっている。「中国の諺に〈大地が息づくとき、人、それを風と呼ぶ〉というのがあります。中国において、エネルギーとは息吹きなんです。つまり、気のことです。風を撮るというのは、中国を語る試みの上でグッド・アイディアでした」

リュミエールとメリエスの間で

❖この『風の物語』はドキュメンタリー映画ではない。これは「リアルなものとイマジネールなものの間に横たわるノー・マンズ・ランド」の散策の成果である。つまり、リュミエール兄弟による現実への視線と、メリエスによるファンタジーへの視線との対立によって画定された、ノン・フィクションとフィクションの境界を越境すること……。メリエスの『月世界旅行』の引用やその書割の再現などは、まさにその象徴といえる。リアルなものを超えるためにリアルなものを撮っているのが、この『風の物語』なのだ。

❖今世紀初めの映画との親近性を示すかのような飛行機、九つの太陽を弓矢で射るホーイや水面の月に見惚れて入水してしまう詩人、といった神話的世界、イヴェンスの心の動きを体現するかのような道化猿の隈取りをした人物のトリックスターぶり、あるいは『破浪』や『四億』といったかつてのイヴェンス作品の引用……さまざまな要素が、イヴェンス個人のミクロ的な宇宙と世界を含んだ

マクロ的な宇宙とを循環しながら、ノン・フィクションとフィクションの境界を撹拌し、イマジネールなものを膨張させていく。

イヴェンスの遺言

❖ヨリス・イヴェンスは1898年11月18日にオランダのニイメーヘンで生まれた。父親が写真器材会社を経営していたため、幼い頃から写真や映画に親しみ、13歳ですでに『燃える矢』というインディアン映画を作っている。父親の会社で働くが、映画への情熱がこうじて友人たちとシネクラブ〈フィルム・リガ〉を設立。そこでの世界の映画人たちとの出会いと映画製作が以後の長い映画人生を決定づけた。

❖イヴェンスは、左翼的な社会意識の強いドキュメンタリー映画作家として、激動する20世紀の世界を横断しながら次々と製作し、世界のドキュメンタリー映画に多大な影響を及ぼした。彼の映画歴には、社会主義建設、産業振興、戦争、中国、自然との闘いなど、幾つかの大きなテーマが見られる。しかも若きイヴェンスの初期作品は、実験精神と詩性に溢れたものであり、そうした精神はその後の社会的メッセージの強い作品にも脈々と流れている。『風の物語』は、それ以前のイヴェンス映画歴の集大成ともいえるもので、その意味ではまさに遺言である。

6月29日㊎より独占公開！

特別鑑賞券1300円絶賛発売中（当日一般1600円／学生1300円／シニア1000円）
当劇場窓口および都内プレイガイド、チケットぴあ、チケット・セゾンにてお求めください。

●上映時間［先着入場 入替制］

土・日	12:40	2:30	4:20	6:10
月→金	1:40	3:30	5:20	7:10

ユーロスペース tel.461-0211 渋谷駅東急プラザ口下車2分 東急観光うしろ